



Title	型染めの表現の可能性と，巨大一枚型の染色
Author(s)	梅崎， 瞳
Citation	デザイン理論. 2016, 67, p. 102-103
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56378
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

型染めの表現の可能性と、巨大一枚型の染色

梅崎 瞳／大阪芸術大学

私は巨大な一枚型による染色作品を制作してきた。巨大なモチーフに魅力を感じて、『巨鯨の海』などをテーマに、鯨を中心に大海の生物や波紋などをモチーフに制作してきた。その作品の制作例とともに、自己の制作の立場を明らかにするため、型染めの歴史と現代の創作的な型染めの傾向についての考察を発表した。

型染めは日本において特異な発達をとげてきた。奈良時代に切り紙の型を用いて模様を表す技法が存在し「吹き絵の紙」として正倉院に伝えられてきた。奈良時代に続く平安時代には木版同様の「蛮絵」や、革を染める為の「踏込み型」などの例があるが、型紙と糊防染による型染めは室町末期から盛んに行なわれるようになったといわれる。版をもちいた染色は、たとえば西洋では機械によるプリント、インドのブロックプリントや、ジャワ更紗のチャップなど多様な発達をとげてきた。しかし日本のように渋紙の繊細な孔版を用い、糊防染に特化したものが数百年の間展開してきた例もめずらしい。その発達した様子は、2012年に京都国立近代美術館と三重県立美術館で開催された「KATAGAMI Style」展によっても紹介され、日本の型紙のデザイン様式が、アール・ヌーヴォーなどに決定的な影響をあたえた状況を検証した結果が発表された。この展覧会は、それまでのヨーロッパでは、オリジナルな模様文化がきわめてとぼしかったことや、プリントばかりで防染による模様染め技法がヨーロッパにうけいられなかったことも同時に気づくことができる展示でもあった。この企画展でとりあげられたの

は、「型紙スタイル」であって、型染めではなかったこと、当時（明治から大正にかけて）の京都では、モスリン友禅に30～60枚の型紙がもちいられるなど、より複雑なデザイン性を追及していたにもかかわらず、ヨーロッパでは日本の一枚型の紋様ばかりに影響をうけたことも興味ぶかく、型染めの魅力を理解する示唆を与えているようだ。

世界の版や型をもちいた染色は、文様化、パターン化したデザインによる小さな型紙をくりかえしたものが基本である。しかし私が取りくんでいる型染めは、パターンをくりかえさない巨大な一枚型による表現である。巨大な一枚型の作品は、京都市立美術大学の染織教育とともに展開をはじめたようだ。それは、大学や所属団体、あるいは指導者によって、型染めの傾向に特色があることに注目すれば明確になるようだ。

現代の型染めの創作は分業ではなく、模様の考案、型彫り、染めを一貫して自分自身が、仲間とで行なうようになったが、たとえば、芹沢銈介を中心とする国画会のメンバーには、伝統的な染め、伝統から出発した個性的な染めの創造などがあるが、その特徴として「紅型や絵模様、一版、反復で多色」などが指摘できる。女子美術大学の型染めは、柚木沙弥郎の影響を感じさせるナイーブなデザイン型の「繰り返し」が主流である。

2011年に京都の染・清流館で2つの展覧会が引き続き開催された。一つは「現代の型染展 Part 1 伊砂利彦 追善展」で、伊砂利彦、没後1年に開催された。伊砂利彦を中心に、伊砂利彦が関係した新匠工芸会、沖縄県立芸

術大学に関わりのある作家たち15名の展覧会だった。新匠工芸会は稲垣稔次郎、伊砂利彦といった型染作家が所属していた。型が単純なりピートにならないように構成し作品を作り上げている。「抽象、反復、左右対称、一版、モノトーン、大型版、モノタイプ、屏風」などの特徴が指摘できる。

ひき続き開催されたのが「現代の型染展 Part 2 西嶋武司とその周辺作家達」である。日展で活躍し、京都市立芸術大学で教えた西嶋武司、没後10年を追善した展覧会で、日展、京都芸術大学にかかわりのある作家たち12名が出品した。このグループの特徴は「具象、非反復、複数版、多彩、巨大版、モノタイプ」などの特徴をあげることができる。特に目立つのは前のグループの「反復のリズム・集約の美」に対して、後のグループには、型の繰り返しがほとんど行われていないという相違である。

世界の型染めは、小さな型を繰り返すのが一般的なあり方だった。後のグループのような大きな型を用い、型の繰り返しを行わず、「型紙スタイル」ではなく絵画的な表現は型染めの常識的なあり方ではなかったことに気付く。そのことは、1994年東京国立近代美術館工芸館で開催された、「現代の型染 くりかえすパターン」の内容を参考にするといっそうに鮮明となる。この展覧会では、「現代の型染め」のサブタイトルに「くり返すパターン」を取り上げ、それが型染めを特徴付けるものとされた。この展覧会には先述した西嶋武司を中心とするグループの作家は、「くり返すパターン」の作品ではないため、ほとんど出品していない。日展や京都市立芸術大学を中心とした作家たちの特徴は、型染めの歴史においては例外的なものであったといえる。

このようなグループによる特徴を比較してみると、自己の制作の立場があきらかになる。

私の作品にも、世界の型染めの歴史における例外的な特徴が指摘できる。たとえば、「超大型版」「一版」「繰り返しがない」という特徴である。私は型紙を一版で完成されたものがもっとも美しいと考えて制作している。また、型紙のデザインには、型紙を使用する作業中に型紙が破れないように、強度のあるデザインが求められ、型に強度が求められることが、デザインの制約や不自由さになるのだが、むしろその制約や不自由さが型を美しく魅せる一つの要素になっているとも考えている。

私が研究している日本の型染めとともに、巨大な一枚型による型染め、そのおもしろさを明らかにすることができれば、型染めの意義ばかりでなく、デザインについてさまざまな理解が深められるとおもわれる。

大会では同時にパネル発表にも参加したが、そこではタイトルを《涼のしつらえ》とし、海の中の様子を表現したテーブルセットを制作。涼を感じていただけるように、また一枚型が美しいということを感じていただける型紙をデザインした。テーブルクロスと同じ型でテーブルセンターを制作。うちわも波を描いた型紙で染めた。日本に多様に発達した波紋の例は世界では珍しく、欧米では流水紋・波紋・波頭紋・波濤紋など水の表現がきわめて少ない。明治35年出版の『波紋集』（森雄山著、山田芸艸堂）の上・中・下3分冊を写本し、創作的な波紋を型染めした表紙も用意して、それを一冊に和綴じして再構成した冊子もテーブルセットに添えた。

参考文献

監修 馬淵明子／高木陽子／長崎巖／池田祐子『KATAGAMI Style』日本経済新聞社 2012
高木陽子『型染紙とジャポニスム ― 技術、画像パターン伝播の諸相 ―』比較日本学教育研究センター研究年報 第6号 お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター 2010